

インゲン（ハウス促成）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
ハウス促成	////////////////////									○○○	-----		////
			■							○	○	○	
主な作業		2 番 収 獲	3 番 収 獲							土 土 壤 づ 消 く 毒 り	施 肥	は 種	1 番 収 獲

インゲン マメ科 原産地：南アメリカ、中央アメリカ

作物名 インゲン

学名 *Phaseolus vulgaris* L.

作型 ハウス加温

技術体系

1 作型の特徴

ハウス抑制栽培からハウス半促成栽培の出荷をつなぐ作型である。年末から6月にかけての長期間栽培となるため草勢維持に努め安定的に出荷できるようにする。

2 適応地域

平坦地域

3 栽培条件

(1) 温度

生育は温度が高温になるほど花芽分化数や開花数も増加するが30℃以上になると落花・落莢等を起こす。低温については豆類の中では比較的強いが、気温13℃で生育を停止する。開花収穫数に影響を及ぼす気温は昼間18℃、夜間13℃である。

(2) 光

インゲンの光飽和点は、2～5万ルクスである。

(3) 土壌条件

排水良好で作土の深い肥沃な植壤土で最も良い生育を示す。酸性には特に弱くpH6～7が適度である。土壌水分については乾湿の害が特にやすく、土壌水分が充分でないと開花数が減少し収量も低下する。逆に加湿状態では生育が悪くなり滞水すると落葉を生じ収量は激減する。

連作障害の対応としてハウス等の施設の場合は、太陽熱消毒や有機物の積極的施用が必要である。

4 施設装備

- (1) 連棟ハウス
- (2) 暖房機

5 経営目標

- (1) 収量 4 t / 10a
- (2) 投下労働時間 2400時間/10a
- (3) 所得率 58%
- (4) 経営規模 6 a

栽培技術

1 品種

「ベストクroppキセラ」

60日前後で収穫できる中性丸莢種。花数多く多収が望める。2番果の開花が早いいため長期栽培向きである。莢は極めて細く色は濃い。

2 圃場準備

(1) 畦立て

本圃は土壌が肥沃で排水・保水性が良く、耕土が深く、日当たり良好な圃場を選定する。長期間の収穫となるため土づくりが多収のポイントである。また連作圃場やセンチュウの被害がある場合は、夏季高温期に30日以上太陽熱消毒をおこなう。またはセンチュウ忌避緑肥作物を育てる。

基肥は、定植する10～14日前までに施用する。施肥量の6割は全層に施用し、残りは畦の中央部分に溝施肥をおこなう。坪12～14本で作付をする。ネキリムシ・アブラムシ対策に薬剤の植え穴処理を

おこなう。マルチは地温確保と雑草抑制のためにグリーンマルチを利用する。灌水チューブを設置し、マルチを被覆する時期は土壤水分がやや乾燥～適湿状態で行う。

(2) 施肥

肥料は有機質肥料か緩効性肥料を用いる。また追肥時期は、開花時から着果時期が最も肥料吸収が大きいため開花前5日頃より行う。

施肥量 (kg / 10a)

	N	P	K	備考
基肥	15	20	15	
追肥	25	15	25	
合計	40	35	40	

3 播種

畦幅1.5～2m、条間40cm、株間40cm 1穴2～3粒播く。立枯病予防として薬剤を1株当たり1～2g植え穴処理する。発芽適温20～23℃である。発芽後は加湿状態にしないようにし、補植苗をポリポット鉢に用意しておく。

4 播種後の管理

GA処理

初生葉展開後の第1複葉が0.5～1.0葉期にジベレリン5ppm、溶液2mlを茎頂部に1回散布する。

処理前日には灌水するとともに、処理後7日程度はやや高めの温度管理を行う。(日中27℃、夜温18℃)

(1) 温度管理

昼間適温23～26℃

30℃以上では、花粉の稔性が悪くなり落花・落莢・曲がり莢の原因となる。40℃以上で生育障害を起こす。

夜間適温15～17℃

13℃以下の低夜温では花がだらだら咲き花粉の稔性が悪くなる。落花・落莢・曲がり莢の原因

となる。10℃以下で生育が停止するため最低温度15℃を確保する。

地温適温22～23℃

根の伸長最低温度は13～14℃。8℃で根が枯死するため最低地温15℃以上を確保する。

(2) 換気

換気はハウス内の温度が確保できてから行い湿度を下げる。インゲンの葉に直接冷たい風が当たらないように工夫する。

2重カーテンを行うところは午前中の光線を確保するため早めに開ける。

(3) 灌水

土壤水分と天候を見ながら4～5日おきに3000～5000l / 10aを灌水する(PFメーター目標値1.5～2.0)。むらのある場所は手灌水をおこなう。かん水は晴天日の午前中に行い、冷たい水で地温を低下させないようにする。葉面散布を行いインゲンの生長を促進する。

(4) 誘引・摘葉

誘引は必ず行い、光線の確保と養分の転流がスムーズに行われるようにする。

混み合う葉や病葉・老化葉は早めに摘葉を行う。懐部分に光線を当て、新葉や若莢の若返りを図る。1度に多くの摘葉は草勢を弱めるため行わない。

5 収穫

開花後14～20日の若莢(12～14cm)を中心に収穫する。こまめに収穫を行い、株に負担がかからないようにする。